



医師といえば白衣を着て診察室にドンと座るイメージだったが、普段着で街に出て住民たちと交流するケースが目立ってきた。「街（まち）ドク」「コミュニティドクター」と称される。超高齢化が進む中、地域で人のつながりをつくり、心身の健康を保つ取り組みとして注目されつつある。

■身分かさず

9月下旬、東京都北区にある豊島五丁目団地。祭りで盛り上がる中、男性2人が笑顔で屋台を引き、住民に50円でコーヒーをふるまう。密山要用（としちか）さん（36）と漆畑（うるしばた）宗介さん（31）。実は兩人とも医師だ。

男子高校生3人組が近づいてきた。「コーヒー飲む?」。密山さんは、屋台の横に広げた団地周辺の地図を指さし、「君たちの元気になる場所は?」と聞いた。お年寄りも子どもも、次々と立ち寄る。

密山さんが「屋台」を始めたのは約3年前。もともと東大大学院講師で医師の孫大輔さん（43）が東京の谷根千（やねせん）エリア（谷中・根津・千駄木）で進める人々のつながりと健康を高める活動「谷根千まちばの健康プロジェクト」に参加していた。地元イベントに「モバイル屋台 de 健康カフェ」として出展したのがきっかけだ。

以来、2カ月に1回ほどの頻度で谷根千エリアを中心に、看護師や建築家らと一緒に「屋台」を引く。コーヒー以外に古本やレコードを楽しんでもらうことも。カジュアルに話ができるように、あえて「医師」という身分は明かさない。

地域で健康相談をやって、「健康状態に問題がある、本当に来てほしい人」は来ないことに悩み、「屋台」を思いついた。「会話の流れに身を任せ、もし医師とわかれば、その意外性から話が盛り上がり、健康相談になることもある。医師や看護師らがまちづくりに参加し、住民にとって身

近な存在になれば、地域全体が幸せになる、という考え方です」と密山さん。住民同士のつながりも深まり孤立を防げる。孫さんは「屋台は様々なつながりを生む装置としての効果は高い」と話す。

————*★*————*

「イカ!」「マグロ!」。アイマスクをつけた男女の声が会議室に響く。様々な魚の形をした菓子を口に含み、何であるかを当てる。9月下旬、東京・赤坂に街ドクの一人、清水愛子さん(39)がいた。

食べ物をかんでのみ込むのに必要な、舌や口の力を鍛えるスポーツ競技「くちビルディング選手権」。普及を担う認定トレーナーの養成講座に、全国から歯科衛生士ら8人が集まった。主催したのは競技を考案した一般社団法人グッドネイバースカンパニー(GNC)。清水さんはその代表理事だ。主な競技は15種目ほど。上唇と鼻の間に貼ったのりを舌ではがす「黒ひげペロリ」や、種をどれだけ遠くへ飛ばすかを競う「飛ばシード」などだ。

清水さんは、広告会社で高齢者向けプロジェクトを行う中で、「食べる機能」に関心を持った。2014年、「参加型の医療・保健活動」を展開しようとGNCを設立、医師になった。

「食べる機能をスポーツ競技にしたら面白い」と仲間と考え、歯科医らの助言も受け競技にした。これまで全国45カ所で、若者を含む2500人以上が体験した。「ヘルスケアには、もっとワクワク感がないと、みんな関心をもたない」と清水さんは訴える。

————*★*————*

■異業種つなぐ

福井県高浜町の医師、井階友貴さん(39)は、町のゆるキャラ「赤ふん坊や」とともに、全国の講演会に出かけたり、町民体操を広めたりしている。住民と医療課題を話し合うなど地道な取り組みだけでなく、町ぐるみで世界最大のちらしずしでギネス世界記録に挑戦するなど、10以上のユニークな企画を進める。

街ドクは異業種のつなぎ役にもなる。兵庫県豊岡市で「屋台」を展開する医師、守本陽一さん(26)や密山さんらは8月、全国の医療やアートの関係者らに声をかけ、「ケアとまちづくり未来会議」を開いた。

■普段の暮らしに目を配る

なぜ、こうした動きが広がってきたのか。

医療政策に詳しいニッセイ基礎研究所の三原岳主任研究員は、超高齢化が進んで慢性疾患とつき合うケースが増え、薬を処方して治療する「医療モデル」から、地域でのつながりなど患者の生活環境にも目を配る「生活モデル」にシフトしつつある流れを挙げる。

三原さんは「ドクターが街に出て市民の生活にふれれば、そこから患者のケアに役立つ地域の社会資源などを見つけることができる。ただドクター主導ではなく、対等な関係で市民の主体性を引き出すことが重要になる」と話す。(佐藤陽)